

文芸

俳句

身に入むや采けし母の昔歌
池田 逸子

雨土と丹精の日々稲は穂に
伊藤 敬子

草紅葉明日は我が身か無縁仏
今関満喜子

いくたびも雲と見上げて月と待つ
魚地 照子

櫓田の青田にまがふ勢あり
江森 悦子

毬栗と蹴飛ばしし中身と見入る散歩道
大谷 武彦

畑や急かれて負けるへば将棋
川島 孝夫

城跡や藪にぶらりと烏瓜
向後 寛

落ら栗と蹴飛ばす子等の帰り道
越川せつ子

マネキンの阿弥陀被りや秋と呼ぶ
小松 藤男

筑波嶺の女神男神鳥渡る
佐瀬 輝夫

手鏡に鶏頭見えて紅とひき
宍倉 道子

穂の栗三つ子の姉妹睦まじく
鈴木とし子

短歌

草紅葉地蔵の頬を染めるかに
玉虫 栗扇

栗を剥く手先に残るもどかしさ
土屋美枝子

小さき手にひろる栗の光りとり
土屋 義昭

防災訓練露けし小道小走りに
戸村 静華

己が顔老けたものだど秋の暮
早川 勇

赤トンボ支柱に止まり動かずに
そよ吹く風に翅を震はす
八角 三枝

こき夫が最後に作りし千推草
惜しみつつそを煮染にしたり
田崎 尚美

秋野菜蒔かむと畑に居る吾に
まといつく虫と息かけて違ふ
佐瀬 初音

独り居の友を訪ねて帰るとき
また来てくれると呼び止められぬ
平山 芳子

幼なき日慈しくくれしこき伯母の
夢目覚めぬお彼岸の今日
芹川 初子

帰りても職場の事を話さない
共働きの夫も私も
島田ますみ

草叢に鳴きつぐ虫の音聞きながら
朝の速歩に今朝も励めり
齊藤つね子

大風に抗する街なし栗の木に
青き実が落つ悲鳴をあげて
越川 義則

街路樹の七電はや色づきて
北国の秋足早なりき
高梨 キヨ

秋刀魚焼く匂いあびつつ平凡に
何事もなくいと日が暮るる
土屋 好

新米の話つきまない看護師の
声とききつつ受ける点滴
池田 春江

久に訪ふ友の手とれば思い出す
外国旅行の梁しかりしと
吉岡 信子

新らしき柱時計の打つ曲に
眠気さまされ夜半を覚めぬつ
鈴木まさ子

三四忌迎えし夫のみ墓辺に
植毛し鶏頭の深き紅
青木 秀子

秋深き畑の中の唐辛子
午後の日差しに紅の冴ゆ
押尾 輝子

こうほう博物館 20

長倉から出た和鏡

今から二十五年前、坂田から遠山まで通る大総新道が造られるとき、長倉の大宮神社の北側にある塚がかることになり、発掘調査が実施されました。塚は一辺8.5mの方形で、高さが2.6mあり、地元では「せんぶ塚」と呼ばれていました。この塚を発掘したところ、盛土の下から銅製の和鏡二面と双盤（密教で使う梵音具）、それに寛永通宝十二枚、土器小皿二点が出土しました。

写真の和鏡は裏面の文様を写しています。その右側の鏡には中央に亀の甲を模した紐を通す突起「紐」があり、その周りに二羽の鶴や松竹梅の図柄を浮き彫りにし、縁に沿って二重の線が周っています。このような文様の鏡を「州浜松竹梅双鶴鏡」と呼ばれ、室町時代末から江戸時代初めの作と考えられています。縁は厚手に直角に立ち、直径11.6cm、重さ410gあってずしりとします。

写真左の和鏡も裏面を写してあります。中央にある「紐」は周りに菊花を配し、裏面全体に亀甲文で満たされ、亀甲の中には花文を入れ、また亀甲の上に雀二羽を浮き彫りにしています。このような和鏡を「亀甲地双雀鏡」と呼ばれ、室町時代の作と考えられています。直径は11.6cm、重さ190gを測ります。

このような鏡が出た長倉の塚は何のために作られたのだろうか。地元には伝わる「せんぶ塚」を「千部塚」と解すると、お経を埋納した経塚と考えられますが、発掘ではお経を入れた器が出てこなかったため、そう断定することはできません。しかし、一緒に出た寛永通宝から塚が作られた時期が、十七世紀後半以降であることがわかり、その時の習俗を知る手がかりになります。



▲長倉和鏡